京都工芸アーカイブ

2019年度活動報告

海外コレクションに所蔵される京焼の調査を継続的に進めてきたが，本年はインド・ハイデラバードのサラール・ジャング博物館の所蔵品調査を行った。インドに3館ある国立博物館のひとつで世界中の美術工芸品が展示されている。ニザーム藩王国に仕えたサラール・ジャング家のサラール・ジャング三世（1889-1949）が収集した美術コレクションが基礎となっている。

今回の調査の結果，収蔵品の中には2000点を超える数の日本の美術工芸品が収蔵されており，明治期の後半から戦前期の京焼が相当数含まれていることを確認できた。東京国立博物館所蔵で1893年に開催されたシカゴ万国博覧会に出品された七代錦光山宗兵衛作《色絵唐草文獅子鈕飾壺》と同型の作品など優品も少なくない。コレクションには陶磁器の他にも，刺繍・金工・牙彫などを含んでいるため，来年度はそれぞれの専門家チームを編成し本格的な調査を予定している。日本の工芸品を積んだ船が必ず寄港したインドであるが，これまで研究対象にはなってこなかった。作品調査だけではなく，コレクションの歴史や購入のルートなどを調べることにより，京都を含めた日本の美術工芸の広がりを解明することになると期待している。

本年は昨年から継続してきた1994年に開催された「五条坂を知る会」の録音テープ6回分12本の文字起こしを進めた。本テープには五条坂の記録としては極めて貴重な内容を含んでいることが分かってきた。来年度は作業を終えて，内容に関する研究を行い可能な範囲での公開を目指す。

前﨑信也（芸術資源研究センター客員研究員）